

厚高インフォメーション



119

卒業式

ここ厚真高校にも巣立ちの時がやってきました。三月一日、本校体育館にて第三十回卒業証書授与式が挙行されました。今年度の卒業生は男子二十二名、女子十五名の計三十七名。過去十年間で最も多い数です。式では鈴木校長から卒業生一人一人に卒業証書が手渡されました。

卒業生代表の堤勝則君は答辞で、「三年間、担任の金川先生に迷惑をかけてしまった。それでも先生は私たちのことを見捨てないでずっと信じてくれた」と三年間を振り返り、「厚真で受けた恩を忘れず、次の世代の見本になれるような立派な社会人になります」と述べました。

式終了後、三年生の教室で最後のホームルームが行われ、担任から卒業生に饒の言葉を、卒業生から担任へ合唱と花束のプレゼントが贈られました。

最後は玄関で在校生に見送られながら、さまざまな思いを胸に卒業生は巣立っていきました。外はきれいに澄んだ青空が広がっていました。三十七名の未来がこの空のように明るく、輝きに満ちたものになるようにと祈りつつ、卒業生を送り出しました。

今月の記念日

4月8日は「指圧の日」

正しい「指圧」の普及により、人々の健康増進に貢献しようと、日本指圧協会が制定しました。4と8が指(4)庄(8)の語呂に似ていることや、四月八日が釈迦誕生の日で、釈迦の慈悲の心が指圧の心「母心」にも通じることから、この日とされました。

指圧とは文字どおり、手指を用いて人体の外表に圧を加え、体調を整える治療法のことです。

人は体に、だるさ、うずき、痛みなどを感ぜると、自然と必ずそこに手をやり、状態に依じて、さすったり、なでたり、押ししたりして、自ら痛みを和らげようとします。こうした人間の本能的操作が、いわゆる「手当て」の始まりといわれています。

「指圧の心 母心 おせば命の泉湧く」。同協会の母体を創った浪越徳治郎氏が、出演したあるテレビ番組の中で、自作自演の振り付けで視聴者に向けて放ったこのスローガンは、当時話題に

なりました。浪越氏は少年時代、医者もいない、薬もないという環境の中で、難病に苦しむ母の痛みを和らげようと、日夜母親の全身をさすったり、押さえたりして、指圧の技法を会得したといえます。

指圧療法は、こうした手指の本能的操作を科学的に究明し、体系づけられた日本発の自然療法です。医療従事者として国家資格で認められた指圧師が、体の状態に依じ、圧法や圧加減、加圧速度など、圧の具合を変化させながら、ゆっくりと、あるいはリズムカルに操作して治療します。

健康へのニーズが多様化する中、指圧療法に対する評価も高まっています。体調管理や疾病予防など健康増進の面でも効果が期待できるからです。今や海外でも実践、研究されている指圧。指圧の根底にある「母心」の思想も、世界に浸透し始めています。

文芸あつま ◆短歌◆

回転寿司に食欲満たす孫ふたり分の支払ふとして成長をみる

(本町 飛谷 文子)

後期なりと苦笑すれど元氣だし長生きせんと前向きになり

(新町 中田 八重)

たずね来る十九年ぶりの先生にしばしの間旧交温たむ

(上野 宮崎 静恵)

(あつま文芸友の会発行『文芸あつま 第十四号』から抜粋)